



ふおれすと鉱山は、市民会議による10年以上にもわたる議論によって、その基礎がつくられました。

こうした『自分のまちは自分たちで』という市民パワーは大切な資源です。いま登別にある『市民パワー』をさらに生かし、引き出し、再構築することにふおれすと鉱山は挑戦しています。

ふおれすと鉱山が基本理念の一つとして掲げているのが、コラボレーション（協働）。具体的には、『市民懇話会』を設置し、事業や運営の評価、計画を、利用者としての市民、専門家としてのNPO法人（ねおす）、そして運営者としての市が『円』の関係で話し合っています。

また、ふおれすと鉱山市民支援組織『モモンガくらぶ』（自然愛好グループのメンバーなどにより平成14年6月結成）が、ふおれすと鉱山を活動の場としながら、施設整備や事業運営に協力するとともに、鉱山地区の自然を満喫しながらハイキングを行う『ワンデイハイイク』や初心者を対象に幌別川の沢登りを行う『清流ジャブジャブ』など、独自に事業を展開しています。



ふおれすと鉱山が提供する自然体験プログラムは1時間程度のものから3日間にわたる大がかりなものまであります。

それは、社会教育施設としての使命を果たすことができるように、すべてのプログラムがオーダーメイドで作られ、「私はこんなことが学びたい」「子どもたちにこんなことを学びたい」という利用者や引率者の主体的なねらいを達成できるように工夫されているからです。

ところが、多くの社会教育施設ではこのようなことは行っていないのが実情です。それは一つ一つのニーズに対してオーダーメイドのプログラムを展開することは、多くの時間と労力、コストがかかるからです。

じっくりと一人ひとりの話を聞き、その人が達成したい目標に少しでも近づけるように、その時、その場所にあった素材や情報をもとにプログラムを組み立ててゆく。そんな当たり前の考え方がふおれすと鉱山の『オーダーメイドの自然体験プログラム』という形になりました。



展示物や野外の自然に触れ、体を動かす。それをもとに参加者同士が語り合い、他者の考えに触れ、価値や見方の多様性に気づく。それは、『教える』と『教えられる』といった決まりきった関係や書物からは生まれません。

そこで、『実物に触れる・多様な気づきを認める・コミュニケーション力を向上させる』をふおれすと鉱山の教育の柱としました。

さて、その実践には五感のすべてを使い、遊びながら学ぶことができ、興味喚起される空間がまず必要です。

それは今は失われつつある『地域社会』そのものです。特に北海道に根付いていた、砂場もスケートリンクも（開拓当時は学校さえも）地域でつくったような相互扶助的な教育環境を、もう一度、評価し直そうと考えました。地域の子どもは地域みんなで育てる。そうして、最新の教育方法に影響を受け、それらを取り入れながらも、もとも地域にあった教育環境を再評価し、再構築していく新しくも懐かしいふおれすと鉱山の教育スタイルができあがってきました。



ふおれすと鉱山をとりまく自然環境は、鉱山町の主役。しかし、かつて皆伐された森と汚された川の自然度は今もって高くはありません。

『人と自然のふれあい拠点』として保護一辺倒ではない管理を行うために、ふおれすと鉱山では、市民が森での遊びを積極的に楽しめるエリア、再生しつつある森林と動物たちを護るためのエリアなど、多様な目的をもって管理する方針を立て、活動を進めています。そのために行われている野生生物の基礎調査も重要な仕事です。これらの調査結果をもとに、なるべく自然環境への影響を抑えた利用の仕方を模索しています。

鉱山町の山林は、そのほとんどが民有地であるため、断りなく自由に森の中で遊ぶことはできません。

そこで、市民の要望から行政が森を買い取り、目的に応じた管理を市民のみなさんと一緒にやっていくという提案がありました。その舵とりをするふおれすと鉱山は、保全と利用の両方から、一番良い形の森づくりを、市民みなさんとともに目指していきます。